

さつき保育園 中村橋 園長 白川真由美

私たちの木育は、
森ではなく、
駐車場から始まりました。

小規模保育園の木育のカタチ



2023/03/09

さつき保育園 中村橋

背景 木育の現場

池袋から電車で12分。23区の小規模認可保育園の木育

21人

小規模認可保育園（0～2歳児）

練馬区 駅近

都心のビル街ではないけど、都内の住宅街の一角で自然物はなかなか見当たらない環境

園庭は駐車場2台分

マンション1階にある、自前の園庭



▷保育園のエントランス

何もしなければ自然とはあまり関われない、23区にある小さい保育園です。

さつき保育園 中村橋

都会？町の保育園でも自然との関わりをあきらめない

さつき保育園 保育目標

- 心身共に健康な体をつくろう
- 基本的な生活習慣を身につけよう
- 自然の中のびのびと遊ぶ経験の中興味
関心を広げよう



▷よもぎ洗い中



▷切り株でワイワイ



▷園児による田植え



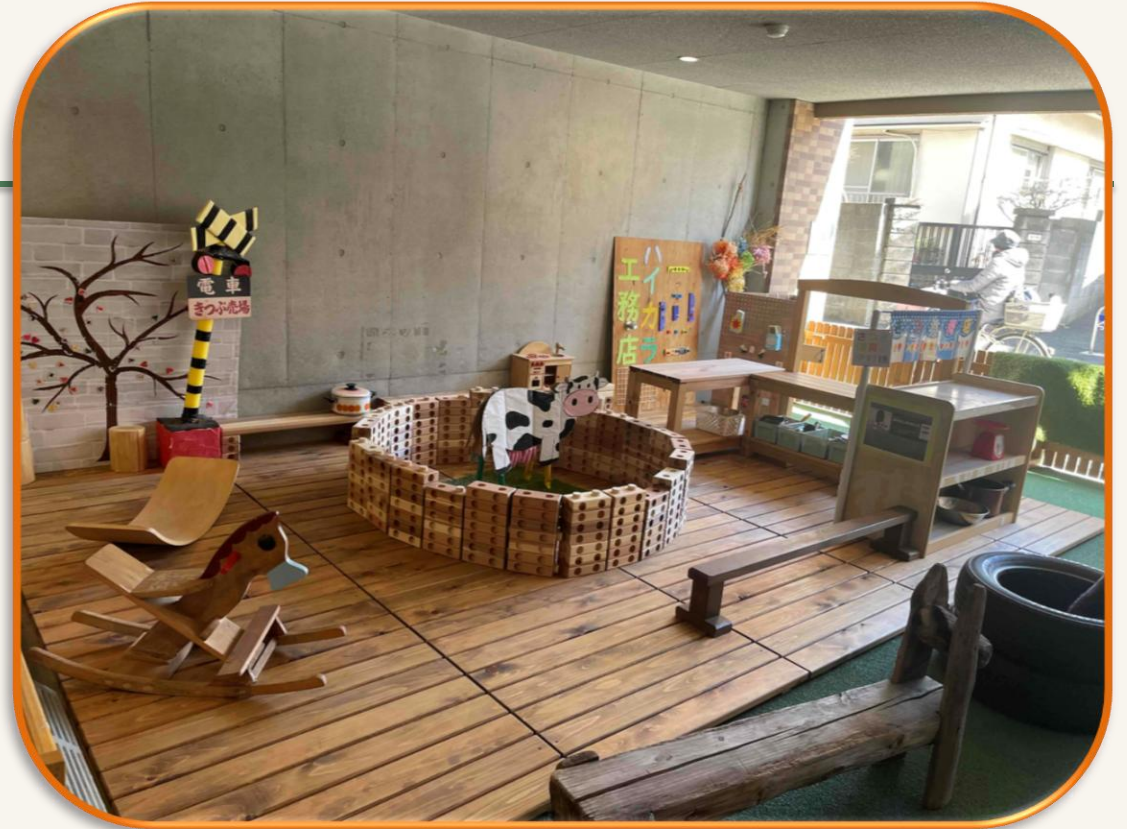
▷本物の竹で流し素そうめん

木育は突然始まった「特別な活動」ではなく、保育目標にもある日常的な活動
五感で味わう日常のさつき保育

駐車場を子どもの場所に。



かつての駐車場（Before）



自然素材が詰まった、現在の園庭（After）

最初のアクション: お金をかけて設備を買う前に「まず近くに聞きに行く」

- 近くの公園の管理事務所へ直接相談。「剪定で出た切り株を譲ってもらえませんか？」
- 都会の限られたスペースを本物で満たすため、行政の支援事業や木の専門家との関係を徐々につなげる。

木育がもたらしたモノ



「この子、こんなに夢中になるんだ」

- 保育園の教室では、大人しかった男の子
- 何がやりたい子なのか迷った保育者



- 近所にある公園で木を使って遊んだり、木に登ったりして夢中で遊んでいた。
- こんなに遊び方の余白が大きい子だったかのかと保育者も驚き。

自然に触れることで、室内では表に出なかった園児の遊び方の“余白”に気付くことができた。

「これ、死に節。」；園児の発言です。



【観察】

木・枝に向けるまなざしは大人にはない熱心なもの

【たたく・ならす】

木と木をぶつけ、異なる音の響きに耳を澄ます

【匂う・まとわせる】

削りくずを体にまとわせ、豊かな香りに包まれる

大人が少し言葉を添えるだけ、素材そのものを見るようになる。
死に節を教わり、見て理解することで、自分でどれが死に節か区別できるように

竹林で終わらない。遊びは園に帰っても続く。



竹林での「特別な体験」 (園外活動)



園に戻った後の「日常のごっこ遊び」 (日常保育)

持ち帰るのは「竹」という素材だけではない。体験が、子どもたちの自由な創作へ地続きに広がる。

どうやって環境を
作ったのか

ないなら、町に借りに行く。



- 場所をかりる
ご近所さんの「竹林」へ

- 室内で木に触れる環境をつくる
何があったら子どもが喜ぶか

- 専門家へアクセス
近所の工務店に相談
(ちゃっかり作ってもらうことに。。)

「全部を園で用意しなくていい。」歩いて行ける範囲にある町の資源こそ、私たちの大きな園庭。

子どもだけじゃない。保育も面白い。



「やらなければ、にしない。」

① 大人が驚く

木の香りに保育者自身がまず「いい匂い！」と感動する心

② 職員が広げる

「次はこの素材を」「ここに置いたら」と自発的に工夫する

③ リーダー任せにしない

園長だけの活動にせず、みんなで意見を出し共有しあう

日常の保育が、地域に見える。



▷ 歩行者からもよく見える場所にあるエントランス

「見える日常」が地域に 保育園の自然との取り 組みのアピールに

✓ 特別な説明の場は不要

説明会やイベントを開くのではなく、子供たちが笑顔で自然物と触れ合っている「いつもの姿」を見えるようにする。

✓ 保育目標の浸透

「あの園は自然を大事にする園だね」と、外を歩くご近所へ理解が広がる。

✓ 信頼関係の土台

日常が包み隠さずオープンであるからこそ、地域が、好意的に見守ってくれる循環が生まれる。

「あそこの保育園の子ども、竹で遊んでたよ。」
せつかく木であそぶなら、地域に保育目標を浸透させよう

続けていたら、木が向こうからやってきた。



▷90年前の木馬



▷木製ラック



▷木彫りの熊
(子どもに人気です)

地域から園へ託された 「木のたからもの」

- 約90年前の木馬

「さつき保育園の子どもたちなら、きっと大切に遊んでくれる」と近隣の高齢者が思い出の木馬を寄贈。

- 木彫りの熊

「最近熊が悪者になっている」「子どもたちに熊を正しく理解してほしい」と近所の方からこちらも寄贈。園児に人気の様子

- 受け継ぐ「木の価値」

卒園する保護者から園に寄贈されたの木製のラック。保護者にも自然を大事にする園の姿勢が伝わっていたと感動。木のぬくもりが次の時間をバトンタッチする。

まとめ

木育は、園の中だけでやらなくていい。

「マンション1階、駐車場2台分、21人の小規模保育園」が実践を通じて見つけた、明日からできる最初の一步

枝一本から。

お散歩で拾った枝、少し分けてもらった木片を、砂場や保育室に置いてみる。子どもがどう遊ぶか、使い方を委ねてじっと観察することからスタート。

相談一つから。

「園の中にない」ことを諦める理由にせず、近くの公園、近所の人、地元の材木屋さん、木を知るプロへ「まず一度聞いてみる」行動から道が開ける。

日常を見てもらう

保育目標は日常に。
日常は町の人に。
園の取り組みが理解されれば木育は思わぬ方向に進んでいきます。

Thank you for your listening !

